

(長野原 加納 武彦)

応召から帰国まで

京都府 金谷 要 一

応召から入るまで

いつもながらのB29の空襲にはなれっこになっていくのに、今夜の空襲は特にしつこい気がした。昭和二十年三月十三日の夜である。戸外に出て驚いた。南西の方角の空が茜色に赤く染まっている。こりゃ大変だ。足が震える感じで、気がいら立っている。大阪方面だ。

当時、私は京都から山陰線で一時間の距離にある田舎町の中学校の教師をしている兄夫婦の家に下宿して、京都大学内にある研究所に、満州の人造石油製造会社に勤務していたので、派遣されて内地勤務になっていました。

翌日出動して大阪が全滅に焼け出されたという知らせが入って来た。ここまで米軍に迫られたら、いつま

で日本も応戦できるか、不安と悲壮観で複雑な心境であった。そして神戸、名古屋と次々と焼け野原となっていた。五月十四日、仕事から帰ると「えらいこっちゃで」と義姉が召集電報が本社から来ているといつて渡してくれる。

覚悟はしていた。既に沖縄も戦場になっている。今さらどれだけ抵抗ができるだろうか。心細い限りであった。憲兵隊に出頭すると、満州までの切符はすぐ買えた。博多埠頭、朝鮮の麗水の港では、満州より内地へ還送する大変莫大な物資、兵器にこた返すような兵隊の動きをみていると、まだ本土決戦も大丈夫かなアと思ったりもした。

無事入隊しましたが、毎日の訓練はたこつぼ掘り、対戦車爆雷攻撃ばかりであった。もし終戦が遅れていたら、恐らく今日の日はなかったであろうと思うと、背筋が寒くなる思いがします。ソ連の参戦が決行され、対戦車壕掘りを円匙一本で毎日毎日行い、奉天の大きな街の守りをどうしようとするのか、正気のさたとは思えないけれど、それが兵隊というものかもしれない。

八月十七日停戦の命令を聞かされて、八月二十日北大營に集結を命ぜられて、ソ連兵のマンドリン自動小銃の罫いの中に入れられてしまった。我々の三八銃で戦争をすることが非常識も甚だしいことであった。

九月初め、日本に帰国させるから出発の準備をするようにとの命令が出たが、日本は物資がないから極力持てるだけ精いっぱい持つようにとのことであった。不思議に衣、食は潤沢にあった。毛布、シャツ、綿布、靴等々、あらゆるものを背囊にいっぱいくくりつける。一人では立ち上がれないほどの五十キロは皆背負ったと思う。

奉天駅には市内から略奪したと思われる工場からの機械類、機具、穀類らしい麻袋などが長結の貨物列車に積まれているのが目立って腹立たしい。北上する我々をウラジオストク經由で日本に帰すという。だが不安を感じる戦友で地理に詳しいものが数人、夜陰に乗じて逃亡をしたが、無事に故国に帰ってほしいと願うのみであった。我々は北上するが、難民の婦女子を乗せた列車は南下する。すれ違う同胞が「兵隊さん

頑張って」と声をかけてくれるが、我々はどうしようもないことで、無事に日本に帰ってくださいと励ますしかなかった。

ハルピンを過ぎて、黒河の方へと汽車は喘ぎながら、北安の街を過ぎるころより戦闘の跡が生々しく、敵しく残っている孫兵、壕壕の近辺ではソ連の戦車、トラックの残骸が転がっている。激しい戦闘の傷跡も痛ましい。

北満の終着駅の黒河に着く。遙か彼方にソ連のブラゴエンチェンスクの街が点在している。向こうも砲撃で傷んでいるが、黒河の方がもっとひどい破損をしている。その国境の街を挟んで黒龍江の混濁した水の流れば幅広く、思ったより水量は多いようだ。

ここで二日間滞在する。その間にソ連に運ぶ略奪物資をハンケに積み込む使役をさせられる。自分たちでとったので自分ですりゃよいのにと腹が立つ。その二日の間に我々の持ち物の略奪が始まった。彼らのほしがった物は、一に腕時計で左右の手に二つずつ、五、六個をはめ込んである。拒否をすると銃をつきつける、

またつきとばす等、いかんせん我々は何の抵抗も防御もできない。情けない囚われの身の悲しさだ。彼らはどれだけ利用するだろうか。それに万年筆に指輪、さらにこれが必要と思つて大事にしている毛布まで取り上げられる。万年筆なんかインキがなくなればどうするのかと心配をしながら、我々にはもう余り必要もないものとなっているのだからやるが、毛布をとられた者は早速、野宿に困つた。時は既に九月中旬になっていて、氷の張る寒い季節になっていたので、お互いに利用しあつたものだ。

いよいよ黒龍江をハシケに乗って渡るときが来た。
列車の旅

十月九日、ブラゴエシチェンスクより長編成の貨物列車に乗せられ、夜の中に発車した。夜が明けると、既にシベリア本線に入って快走をしている。ここからシベリア鉄道でウラジオストク経由で日本に帰国という話だったので、夜が明けるとみんなでそのように走っているかとのにぎやかな話題となつたが、残念ながら朝日を背に向けているという事実が確定したので、

みんな腹を据えてシベリアの奥地に向かうという覚悟を決めた。諦めと悲観の空気で重苦しい消沈の日々を迎えることになりました。帰国の希望はあえなく断たれることになりました。

我々の列車は有蓋貨車で十疊くらいの広さで上下と二段に仕切つてあり、一両に五十人余り乗り込むために大変窮屈である。上段は百二十センチくらいの高さにあつた。それに家畜等の輸送に使つていたと思われるのは、壁に牛糞が多量に付着していたのを急ごしらえて日本兵の輸送に転用したと思われることでした。

そしてもう一つ困つたのは用便である。寒いので小用はお互いに頻繁に催すのですが、進行中のこととてドアを少しあけて放出をする。ところが自分一人ならまだよいが、後続車にも同時に放出している者がたまたま重なると、大変なことになるといつて、罪を大きくあけることは大変寒い時期になっていたのでできない。停車したときに後部の者と大げんかとなることがある。腹をこわして、下痢の連中もたくさん出来る。このときは友達が手伝つてやつて用事を済ませますが、汚物が飛

散して汚してしまふような悲惨な状態で、停車したときに本人が掃除をするという話合いで秩序を保っておりました。

列車は我々には想像もつかない白樺や落葉松の広大な原野を、ところどころに点在する民家や農場の中を突き進んで行く。駅に一日中停車することもあれば、一日中ノンストップで走り続ける。列車が停車するとすぐ炊事にとりかかる。我々の持参のものを取り出してするのだが、ゆっくりのときもあるが、時には飯が炊き上がる前の半煮えのころに出発となるときはどうしようもない。もう十分間待ってくれと言っても、容赦なく、火を消して乗車しなければならぬ。半煮えの飯を食べなければならぬことになる。いろいろと苦しいことながらも、このときはさほどの苦境にあると思わなかった。ペトロパフロスからシベリア本線に別れて支線に入る。みんな不安な様子だ。どこに行くのだろう。出る言葉も少ない。

支線に入って三日目に着いた駅で下車命令が出た。ブラゴエンチェンスクを出発して今日で十月の初めて

ある。約三週間余りかかっている。駅の名はカラカンダというところだと警備兵は言った。我々には聞いたこともない街である。一体どのあたりなのか、地図がないので、不安は一層募った。シベリアの果ての忘れられたところかもしれない。また重い装具を背負って歩いて着いたところが、カラカンダ第十捕虜収容所であった。

檻と生活

そこは少し緩やかな台地らしきところに板塀と鉄条網に囲まれて、ところどころ監視哨のやぐらがそそり立っていた。これが我々日本人を出迎えてくれた別荘であった。人数を点検して門を入り終わると、ガチャンと錠がかけられた。

早速に宿舎が割り当てられた。が、すぐに今からの生活のための作業の割り当てが始まった。今日まではお客様扱いであって、肉体的には楽であったけれど、この檻の中の住人となったからは、自分たちの生活のためとソ連の国家のためとの二つの道の厳しい極限の生活が始まるとは考えもしなかったけれど、現実と

なつて今から始まるわけである。

炊事、便所の準備、燃料の確保、宿舎の整備、食糧の運搬等々で、既に嚴寒のときになっていたけれど、冬の衣類の持合わせもない。我々は夏物の厚着をして寒さを凌いだものだった。

まず、宿舎について説明すると、ちようどかまぼこの形をした五メートルに二十メートルくらいの広さで、半地下式になっていて、中央に通路があり、両側に二段式のベッドが並んでいる。二寸角のタル木に板を並べたもので、製材したままの荒っぽいものだった。それに我々が持参をした毛布を使い、ソ連から支給されたものは何もなかった。上段の枕の高さの位置が、ちようど外の地面の高さくらいで、ガラスが明り取りに入っていた。通路にはペーチカ（暖炉）が二か所あり、石炭を燃料に使っていた。宿舎の屋根は五十センチくらいの土盛りがしてあり、なるほど、これなら寒地では暖かいと思った。雪は降るが、夏には雨が降らないので、これならと思った。でも、電灯は二か所十燭光くらいのものがあつただけであつた。

数日間は片づけもの、環境の整備等で過ぎしたが、ぼつぼつとソ連の本性が出だした。時間の制限や昼夜の別を問わず、貨車の貨物の積みおろしに駆り出される。二週間くらい経過したころに体の健康状態の外観調査があつて、よほど弱々しく見える者だけを外して炭坑に入り、石炭掘りに従事するということで、初めて綿入れの分厚い大きな外套とゴム短靴の支給を受けた。これで所持をしていた軍靴は没収されることとなる。

当カラカンダは、ソ連での石炭の産出量では第三番目という巨大な炭坑街だったのだ。面積は広く、深く、また露天掘りをしているところもあつた。その炭坑に我々は十月下旬より入坑することになる。一日三交代八時間制ということになる。我々は杉山大隊と呼んでいて八百五十名くらいだったが、我々は六十四坑に、他の一隊は八十三坑にそれぞれ入坑することになった。我々は覚悟はしていたが、石炭掘りをした経験者は隊の中に数人いたくらいで、思っただけでも息が詰まる気がする。一日目だけスコップの使用方法を教えて

くれたけれど、坑内作業のやり方、事故防止、安全対策等については一切の説明もなく、無理に押し込むというやり方であった。

青空の下の明るいところなら、危険なことでも多少と自分なりに危険予防も考えられるが、あの真暗な中で安全対策は全然ないということである。ただあるのは換気装置があるだけで、それ以外は全然ないのである。日本の国内ではこんな状況では採掘許可は出ないし、明治時代の状況だということであった。

初めての入坑が始まった。四キロメートルほどの道程のある六十四坑は、ここでは古い部類の方に入るとかであった。入り口で手提げの、灯油の煤のよく出る火の灯りの悪いカンテラをもらうが、拒否をしても順番だからといって聞き入れてくれない。露天掘りをしているくらいだから、炭層は割と浅いところにある。

四百メートルほど斜道を下り、横道を三百メートルで切羽の出口のところに着く。切羽よりコンベアーでこの横道まで送り出す。この横道は炭車の通路でもあり、軌道が敷かれている。このような切羽が数か所あ

り、十五人から二十人くらいで一班をつくっている。

ここまではまだよいとして、これからの非常に危険な部署なのだ。炭車係は炭車に石炭がいっぱいになったら、炭車を入れ替えるだけであるが、発破の現場まで行くのは大変で、危険が大きいのです。まず、発破を先端の切羽に仕掛けて石炭層を崩して、それをスコップでコンベアーに積み込むスコップ隊と、石炭をコンベアーで炭車に送る作業になる。

ところで、時間交代がきても、コンベアーは停止をさせてくれない。時間があったくないということだ。だが、切羽の先端まで登りつめるには広いところもあるが、落盤しかけて非常に狭いところもある。その狭いところはコンベアーの上を通ったり渡ったりする場合もある。コンベアーはショック方法で、石炭を流している斜面の上に乗っている。石炭の上を歩くことは非常に困難だ。登ろうとしても石炭で磨かれたコンベアーの面は滑って苦勞をする。ちょっとした拍子にランプが消えることがある。こうなると、絶体絶命である。身動きができない。御存じない方が多いと思うが、

普通地上では、墨を流したような暗さを暗黒というけれど、目がなれば、まだ微かな明るさがあり何とか行動ができるが、坑内では暗夜に目隠しをされた状態であって、手探りができないのです。うっかり手を出すと、コンベアーが動いているので、手でも足でも頭までも挟まれる危険があり、そのままの状態で流れてくる石炭に足をとられないようにして、坑木にしがみついて、誰かが通るのを何時までも待つしかないのです。

また落盤のある箇所を通り抜ける場所もあります。このようなところは現場に馴ればある程度察知はできますが、ソ連人の無理な追い立てによって、仲間の一人が眼前で厚さ三十センチで疊二枚分くらいのボタ「石炭の層を包んでいる黒い石」の落盤により痛ましい犠牲となりました。

それから、記述が微に入り細かく記していきますが、私としてはこの炭坑生活を丸三年勤めてきましたので、これについてしか体験がないので、しつこいようすが、詳しく述べさせていただきますと思います。

まず、切羽の先端は三メートルに二メートルくらいの壁になっている層にドリルで一・五メートルくらいの深さの穴を四ないし六箇所にあけると、ソ連人のおぼちゃんやダイナマイトを埋める。爆破するのはほとんどソ連人の監督が行う。この爆破は一番方のうちでは大体二回行うのが普通であった。発破がかかったらすぐに我々を現場に追い上げて、石炭の積み込みに駆り出す。我々は五分間発破がかかっても待つてほしいというのだが、監督は物すごい形相で、ダバイダバイとこづきまわしたり押し倒したりをする。叩くことはされたことはなかったけれど、発破がかかったときは、硝煙の臭さと炭塵であの暗さの中で呼吸もできない。作業ができない状態なのに無理に押し込んでもかえって能率も悪いし、健康を損ねると説得するも、頑として聞いてはくれないのである。

次に爆破した石炭の積み込みをする。ショック式の吊り下げたコンベアーの長さは五十メートルから百メートルくらいあり、その下にある炭車の中に積み込まれて横坑道から斜め坑道まで送り、そこから巻き上

げ機で地上に昇って行くことになる。ところで、コンベアーであるが、ちょうど平たい桶の形で、長さ三メートル余りでポルトでつなぎ合わせるが、途中が右に左とカーブになっています。モーター部はコンベアーの中部より下の方に設置されていたが、株式会社日立製作所の社名板も鮮やかに光り輝いていて、ここでも日本の製品が活躍しているのに我々も驚いた次第である。

というわけで、コンベアーがワイヤーで坑木を吊り下げているが、運動に無理があるので、カーブで石炭がたまり重くなる。石炭がこぼれるので、そこに一人すくい上げる者を配置させねばならない。また、ワイヤーの摩擦で、コンベアーが磨滅してワイヤーが食い込んで、石炭の流れを食い止めて下へ降りてこない。炭車方から少しも出て来ないと連絡があり、班長が不良箇所があるところを探しに走るといふようなちぐはぐな作業が連日のごとく行われている。

我々にしたら、一時機械を止めても完全に不良箇所を修理して調整すれば、その日は成績が悪くても次の

番方でそんな遅れは必ず取り返し、楽してノルマの達成は数倍になるといふのだが、どうしても彼らには忠告を聞き入れる耳は持たなかった。彼らにはこんな単純な能率向上の理屈がわからないのかと不思議に思われた。

ともかくにも今の作業の成績がすべてなのであり、ノルマの成績が悪いのがしばらく続くと、突然に新しい監督が来ていて、従来の監督が一般の労働者に格下げされて我々と一緒になって働くという、問答無用の厳しい処分によって、責任をとらせられるということは何度となく見せられる社会組織であった。

しかし、このようなことからソ連の事情が少しずつ理解することができてきた。長年にわたり共産社会主義を教育してきた成果なのであろう。連邦を維持するには、このようにして権力者と労働階級との区別をしないことには成り立たないのであろう。ただ、がむしゃらに命ぜられたままに体力を使えばそれでよいのかもしれない。知力での労働は上級へ任せておいて、成果の良否は上級者の責任において成績が問われてい

るようであった。番方交代時には機械を止めた方がスムーズに交代もできて作業もはかどるという意見の具申も、てんと受け付けてくれないのである。

我々の班は二十人近くで編成されていて、班長がソ連人の監督の指示にしたがって作業をしていた。ほかにソ連人の坑木建て作業員一人、女性の発破係、コンベアーの移動係数人と番方の監督、坑内の総監督の陣容である。

切羽に発破をかけ、スコップでコンベアーに積み込む。流下した石炭はワゴン車にいっぱいになると巻き上げ機まで押し出して、地上に巻き上げられる。切羽には一番方で二回発破をかけるが、これ以上はしめない。どうしても時間内では石炭が手不足するが、それでも石炭を積みという。仕方がないのでポタを承知の上で積みけれど、監督は見ていても知らぬ顔をしている。ノルマを上げることは自分の成績と給与に関係するからである。

石炭を取り出すとすぐに、坑木を仲間が運んでくる。これが大変である。直径四十センチくらいな太いもの

もある。これは二つ割りにして使う。長さ三メートルくらいもあり、狭い穴の中を引いて持ってくる。時には落盤により通路をふさがれて、直径一メートルくらいの輪の中をくぐるような坑道になっている。生の唐松みたいだ。こちこちに凍ったままだ。しつとりと重い。手が吸いつくように冷たい。シベリア沿線で果てもなく続いてきたあの宏大な極寒の中で、多くの同胞たちが命と引き換えに切り出したものに違いない。その苦勞のほども思いやられる。どんな気持ちでやっているかと思うと胸に迫るものがある。

坑木建てが終わると次の発破の作業にかかるのである。坑木建てはソ連人が二人でやっていたが、半年ほどしたころから私が助手になって相方となってやっていたが、坑木建てが暇な時は石炭入れを私は手伝っていた。我々はお互いに仕事の上では分担以外にも助け合うのが普通のように思っていたし、そうして来ていたが、彼らにしたら、自分に与えられた仕事以外は目の前で何があろうと関係ないのである。手伝うのをみて、そんなことはしなくてもよいので、自分の仕事だ

けをすればよいというのである。重い機械の移動を苦勞しているのを見ていてももしらぬ顔である。この国はこのようにして成り立っているのかと思つた。

また、困つたことに、ラーゲルと炭坑の通行に綿入れの外套を支給されているが、坑内の作業では脱いで置いておくところがないので、坑木の間に置いておくと、帰りぎわにとられたか置き場所を間違えて紛失したかでひどい目にあつて、夏布団のような外套を腰に巻きつけて作業をした。炭塵とごみにまみれて汚いことはおびただしが、どうしようもない。洗濯もできない。戦後の浮浪者の、軒下、道路などでごろ寝の姿の衣服類の汚れなどと比較ができないほど、もっとひどい汚れであつた。

カラカンダ地区は、我々は地理に疎かつたけれど、人口三十万人といわれていた。北緯五十度、西経七十五度あたりに位置して、ちょうどインドの北端の遙かに北部にあつて、高原地帯でなだらかな起伏があり、樹木は街路樹がたまにある程度で見渡す限りの夏は草原で、冬は白雪に覆われる。シベリアの大地の中では

シベリア本線の北側よりは気候はまだよいかもしれない。だが、ここもシベリア流刑の土地ゆえに、土地の多くの人は政治犯、経済犯を主体とした罪人やその子孫たちの生涯の地であることには変わりはない。坑内の人たちはほとんどが解き放たれた中での監視された生活であるという。街から五キロメートル以上外へは出られないという。国からの命令のある以外は、他所へ行くことは禁じられているという。市内の人たちの多くが何らかのかわりがあるという。

日が経つにつれて、我々と心の壁がとれて、気安く話をしてくれる。スターリンの悪口や、現体制の批評を打ち明けてくれる。彼らは医者に行つたことがないといつていた。恐らく余り医者もいないのであろう。

我々のラーゲルへ医者らしき者が来たが、日本の看護婦程度の知識があるのか疑問に思えた。

彼らの不満は病気でも仕事に出ないと賃金がもらえないということであるので、我々は彼らを休ましてかわりに手伝つてやつた。彼らの階層は誠に哀れに感ぜ

られた。また、機械係にブルガリヤ人が多数いたが、彼らは強制連行された由で、本国に家族を置いていて、いつ帰国できるかわからないと言っていた。既に戦争は終わっていても、帰国させる様子もない。

さて、出坑するときは、だれもが四キロくらいの石炭を抱えて帰る。宿舎のペーチカに燃すための燃料となる。帰る途中の吹雪の中で、凍傷を起こす者がいる。我々は気づかなかつたが、警備兵が冷たい雪でこすりつける。鼻の頭や耳が青白くなると、さすが目ざとく見つけてくれる。これだけは親切であった。

ただ、困ったのが門の出入りのときの人員の点呼に時間がかかり過ぎるのである。人員の勘定ができないのである。わずか六十名か七十名の勘定が十分くらいかかるので、零下数十度の中でゴム靴に布を巻いた足にはたまらなくつらい。彼らこそフェルトの長靴を履いているので、苦痛は少ないだろうに。

宿舎では他の番方の連中がペーチカで湯を沸かしていてくれる。出坑をしてきたときは、炭塵の汚れで眼と口とがわかるくらいで、顔の裏と表が区別がつかない

いくらいにひどいもので、墨を塗りつけたといっても過言ではない。体格や人相で見分けていたくらいだった。

すぐ、食堂に飛び込むとカウンターに盛りつけたのした皿が並んでいるが、どれが大盛りか見回してから手を出したものだ。人間腹が減るとあさましいものだ。パンは三百六十グラム、これは一日分である。俗に黒パンといつて、燕麦の表がいっぱい混入した粗雑なもので、目方を合わせるために小さなものにはつまようじでかけらがくっつけてある。筋の入った羊の肉にキャベツ、ジャガイモに粟らしきものが若干入っている、ドロドロとした雑炊がどんぶりに一杯である。

食後は疲労で次の出坑まで眠りこけるのだが、腹をふくらませるため、どうしても水分を取り過ぎて睡眠の途中で起き出るが、外は零下数十度もあるので、入り口の近くで放出する。(便所まで数十メートルもある)入口付近はかたくなっており、結局は各自の理性に任せて改善はしたけれども、また便所の方も壮観であった。二メートルほど掘ったところに板を渡し

て屋根なしで三方を板塀で囲っただけのもので、十五人くらいの人が横に並んで用を足すが、なれっこで何の感情も起こらない。下から積み上がって山が高くなくてお尻に突き刺さりそうになると、地上勤務者が鉄棒で突き崩してくれていた。また、夏には囲いの板に蠅がびっしりと止まっていた。そのおびただしさにびっくりする。ただし、人間には割と寄って来なかった。

何万匹ともわからぬ壮観で、いかにも大陸的だ。

すこし捕虜生活になれ始めて、昭和二十一年の正月を迎える。全員で故国に向かって遥拝をする。毎日の厳しい中にも故国のことを思わぬ日は一日とてなかった。零下二十五度以下になったら作業は中止という布告があったが、坑内に入れば零下十度までだったので、一日とて休日ではなかった。三百六十五日を通してのことである。

ようやく春めいてきた四月ころより、食糧事情が悪くなり始めた。パンは三百グラムになり、雑炊はなくなり、食べ物といえれば雛の卵くらいの馬鈴薯が七個か八個くらいとパンだけとなった。これで相変わらざる

入坑作業で、腹が減っただけでは済まされないうちに、出坑時にはだれもが坑道を昇って来るのに壁にもたれて支えられながらの出坑が毎日のようになって。この状況はただごとではないと総員集会を開いて、収容所長に我々の統括の杉山少佐より苦情を訴え、改善がなければ作業ができないと、初めてストライキをした上で入坑を拒否した。

杉山大隊長もおれはどうなってもよいから諸君たちを守らねばと先頭に立ってくれました。入坑拒否したので、炭坑からの連絡だったのか、数時間後に勲章をたくさんぶら下げたお偉いさんが早速に来て、杉山大隊長と実情の説明をやり取りしたところ、ソ連も戦争とウクライナ地方の作物の不作等で穀物は不足をしているので、その点は了承してほしい、しかし、食事の支給は変わらないはずだと言い、収容所長へ質問をしていたが、食糧は善処するので入坑せよとのことで、しぶしぶ我々は休むことなく入坑を続けたが、結局は収容所長は物資を横流ししていたとかで、翌日よりどこかへ降格転動とかで、新しい所長が配属されて来た。

食糧事情は元に戻ったが、杉山少佐はストライキの扇動の罪で、お気の毒にも他所へ移されてしまつて、消息はわからないままだった。しかし、これで食事が充分だったわけではない。出坑後、食後すぐから一時間ほど炊事場への手伝いをする。本当に疲れきつてからである。野菜物の運搬、洗い物、ごみ捨て等、これだけで茶碗に一杯くらいの残り物の雑炊にありつけるのである。これとても、志願者が多過ぎて、くじ引きで決めたりして、たった一杯の雑炊のために自分ながらの惨めさに皆それぞれ感慨が深い思ひ出になつてゐることだつたらう。

六月ころ民主新聞が届いた。だれもがむさぼり読んで、捕虜たちはシベリア地域の全域にわたり抑留されていて、我々だけが辺境の地にいるわけでもないことがわかった。夏らしくなるのは七月と八月だ。雛の卵くらいの青い果物らしき物をかじっているのをみかける。なんとトマトだった。ここでは赤く熟れる時間がないのだ。

八月十五日、盆踊り大会が開かれたが、翌朝はひど

い霜が降りていた。多少説明が前後するが、作業の内容について、健康度検査によつて重労働、軽作業に区別するが、毎月一回殺虫と殺菌を兼ねた入浴を行う。

我々のラーゲルと隣接してドイツ兵のラーゲルがあり、設備が整つていたので出向く。おけ一杯の湯で入湯というより体を石けんを使って洗う。その間に衣類を乾燥室で百度以上の高温でシラミ殺虫を行う。入浴を済ませて陰部の毛を剃ってもらふ(シラミ駆除)、すぐ裸のまま女医の前に立ち、向こうずねを引っ張り、また背向になり、臀部をつねったり引っ張ったりして、弾力を見て、健康度を見る。一、二級は重労働に、三級は軽労働に、四、五級は病人というように、この区分で仕分けする。そのころには殺菌消毒ができ上がっている。ドイツ人はもう三年余り暮らしているという。何時になったら帰してもらえるやらと意気消沈をしていた。おもしろいことに「みよ東海の空明けて」とたどたどしいながら歌ってくれたのにはびっくりしました。

私は三年間区分一級で通して、元氣であつたことに

感謝をした次第です。そんなある日、相棒と坑木建ての作業中に鋸で指を縦に六センチくらい骨が出るほどに切り裂いてしまった。早速に医務室へと班長が監督と交渉してくれたのですが、聞き入れてくれなかった。出坑後日本の軍医さんに診てもらったが、薬がないとのことで、傷に詰まった炭塵を蒸留水で洗い出して後、縫合してくれるのかと思いきや、殺菌ガーゼで縛ってもらっただけであった。ソ連の女医に軍医は休暇を要求してくれたが、にべもなく断られた。休みもとれず、入坑を続けたけれど、幸い化膿もなく、相棒もしばらく大事にしてくれたので何よりであった。

入ソ以来一年が過ぎた。一日がとてつもない。寒くなった炭坑から帰ると余分の仕事が残っている。貨車からの坑木の荷おろし、野菜や食糧の運搬やサイロに我々の野菜の漬物である。キャベツの洗浄もしない鬼葉のまま、畑から取ってきた姿のまま、大きな包丁で四つ割にして投げ込み、上から塩をふりかけるだけの簡単な仕事である。酒造会社の大きなたるみたいなたらシの穴が掘ってあるだけであって、五つ、六

つ並んでいた。これは隊を挙げての余分の仕事として何時ともなしに真夜中の吹雪の中でさせられた。

二度目の正月が来た。心の中は何時も殺風景で、ともすれば沈みがちであった。このころになって、いろいろと趣向を考えて楽団や演劇の誕生をみることになりました。皆さんは器用な人もいて、バイオリン、太鼓、笛、ハーモニカ等自前製で、それぞれ病んだ心を慰めてくれました。

演劇も三隅研次さんという方でした。復員後京都の大映の映画監督になられた人です。自分でシナリオをつくり、大いに和ませてくれました。また漫談、落語等など今もって思い出します。また、こんな歌がつけられみんなで合唱をしました。

流れ雲

- | | |
|--------------|-------------|
| 一、丸い地平に囲まれた | 緑の広野カラカランダ |
| 空は紺碧流れ雲 | 虜囚の身には侘びしかり |
| 二、くちびる結び手を組み | 遙かに忍ぶふるさとの |
| 敗れ戦に荒れ果てた | 山河に寄せる男泣き |
| 三、帰国許され再会の | 日をしを偲べば胸迫る |

幸きさいませよ父母は 無事であれかし妻や子や
身につまる思いで歌ったものだ。

蠅による不衛生のことを記述した。もう一つ困ったのは、南京虫による昼夜にかかわらずの攻勢には大変苦しんだ。入居してしばらくは気がつかなかったのか、疲労でわからなかったのか、先住居者の置き土産と思われるが、木製ベッドのひび割れの間ひそんでいて、寝ついたところにごそごそと出て来て、体中に吸いつき、ひどい人は化膿までするし、蚤やシラミの比ではなく、追えば割れ目に足早く逃げてしまうし、寝ていると上部の寝台から落ちてきて、ちようど口の中に入り、むにゃむにゃと口の中をかみ殺すことがあり、この上もない嫌な臭いを出してへどを吐いた者もいた。が、これも逃れようのない苦痛の一つでもあった。

坑内作業も日々苦しいながらも単調に消化して、監督も日本人の作業の好成績を挙げるのに気持ちよく対応してくれて、追々とすべてを任せてくれ、我々で成績の向上に努力もしてゆくし、両方とも理解し合い、和やかに入坑することができた。

その甲斐あって、ハラショーラポータ（優秀労働者）に対して五日間の作業休暇が与えられることとなるのだが、これもソ連の政策の一つで、作業はなしで思想教育に徹するということであった。共産社会の由来、歴史、共産党史、社会主義の優越性等をみっちり教育してくれる。思想教育である小学校へも見学に行ったが、つくえもいすもないようなところで勉強をしていた。

ちなみに、我々の年代の歩哨兵は、三割近くが無学である等がわかった。数の勘定ができてくいのも、むべなるかなである。我々がこのように活動家として教育を受けても、余りにも現実とかけ離れてはおいそれと鵜呑みに納得するわけにはいかなかったが、これも帰国を実現するための手段と心得ていた。

春の芽生える頃になると、ダモイの話が始める。どこの方ではすでにダモイが始まっているらしいと、真しやかに流言が飛ぶ。だれも口では打ち消しながらも、心の中では本当であってほしいものだと期していたに違いない。ああ、あの雲の流れる方に、日の出る

彼方に故郷の人々は我々の帰国を待っているだろうに
と、恋慕う日々でもあった。

山羊の群が毎日のように瘦せた体を追われながら移動をしていく。十五センチくらいの短い草で、日本の味のあるような草とは違い余りむしり取ってまで食っていない。ところがである。突然ある日バッタの大群が押し寄せてきた。三日間ほどにわたり、物すごい数である。ああいうものの、数の勘定はどのように推定するのか知らないが、ちょうど日食で、太陽がかすんで薄暗くなった状態にそっくりである。人間様も顔を隠さないと通行できない状態だ。彼らの通過した草原は、一葉の草もなく食べ尽くされていた。さすが大陸的で不思議な現象である。アフリカの方でもこのようなことがたまたまあったことを読んだことがあった。とにもかくにも、無限の数に見え、壮観そのものだった。

あっという間に秋風が一過したと思ったら、早や吹雪が始まった。冬季はウラジオストックの海が凍るので帰国はできないとのこと、もう今年のダモイへの

期待は裏切られた。また嚴冬を迎えることになる。明けて二十三年となる今年こそはとだれもがひそかに期していた。また、どうしたことか、零下四十二度の入ソ以来の最低の寒さの試練を受ける。もうだれもが身につける衣服もない。少々あったものはソ連兵に見回り検査とって取り上げられ、少々はまた、民間人との物々交換に消えた。これ以上は支給品もなく、凍え死ぬ以外にないという極限まで追いやられたしまった。希望の春を待つしかなかった。春少し暖かくなりかけた六月ごろに少し様子が変わった。我々がラーゲルより少々南方にあるアルマアタ地方で地上作業をしていたとき、仲間たち三百人余りが突然に入居をして来た。四、五日して、また、どこかへ出所して行った。ダモイではなかるうかと噂が立始めた。

六月中旬ころだったか、突然炭坑内作業をやめて地上勤務に全員がなることを通知される。まさに三年ぶりで太陽の明るい、空気のよいところで石の掘り出し作業に配置替えになる。戦争で一度は命を失う覚悟はあったものの、こうして命を長らえて、また、暗黒の

地下で常に生命の死への危険と恐怖にさいなまれながら心労の負担も極限に達していたのと比べて、初めて生命が甦ったうれしさにだれもが生き生きと輝いていた。

ノルマはここでもあるけれど、さほどに厳しいものではなかった。炭坑内に比べ、月とすっぽんの違いであった。監視兵がヤポンスキースコーラダモイと愛想を言ってくれる。ある程度の事実を知っていたのだろうか。でも、我々は故国の土を踏むまでは心を許すことができなかった。

十月初め、突然に緊急の呼集があり、三時間後に荷物をまとめ、舎内を掃除して、門前に集合せよとの命令が出た。ついに出了、待ちに待った帰国が夢から現実となった。誰も喜び合う言葉もうわずっていた。心は既に故国に飛んでいた。

入ソのときはシベリア本線で三週間以上もかかったのに、今度は同じ線路が二週間足らずでナホトカに到着をした。海が見える、青い海が、これをずっと進むと日本だ。車内に喜びの歓声があがる。

数日後に日の丸のはためく船、英彦丸はナホトカを出航した。嫌な思い出を拭い去ることもできず、深い傷跡を心に秘めたまま、三日後に船は丹後の山々を映し出した。国破れて山河あり、私の眼には、早朝の霞だったのか、涙でうるんでいたのかもしれない。はつきりと眼に入らなかったのが、明らかに記憶に残っている。

【執筆者の紹介】

金谷さんは大正十年、京都府綾部市で生まれました。昭和十四年、神戸工業学校を卒業しまして、当時に国策会社として創立された旧三井鉱山の傍系として満州国錦州市に設立された、満州合成燃料株式会社に就職いたしました。

会社は人造石油をつくるというものでありました。

当時日本は、資源の確保のために農業、工業、その他大東亜共栄圏のリーダーとしていろいろと多方面に努力をいたしていました。特に石油については九〇%以上が輸入に頼っていたわけで、自立自営のために絶対

的に確保する必要がある、一歩先んじているドイツより特許および機械を購入しながら、石炭ガスから水と水素を使って、触媒がその化学作用を助ける一番大事なもの、その触媒の研究が石油の生産のため一番の鍵を握っていて、その研究のために金谷さんは当時京都大学の喜多燃料教室に来ていました。

昭和二十年五月に応召を受け、満州国阜新市に入隊して三か月後に奉天で終戦となり、ソ連抑留を三年務めて、昭和二十三年十一月帰国、同二十五年に結婚し、現在地に居住をしております。

全抑協には京都府連合会の設立当時（昭和五十二年ころ）より尽力を頂いており、以来、京都府連の副会長として努力をされています。

氏はまた、地方自治においても早くから公職の数々を務めていられます。町議会議員、小学校、中学校の育成会長、府立高校の副会長、また、民生児童委員等社会福祉活動にも長年にわたり尽力をされており、厚生大臣を初めとし、数々の感謝状を授与されています。平成五年五月には野田川町より「特別職員」として、

町の自治功勞者として表彰されています。

戦前派の人として、質実剛健の教育を受けた、筋が通った老人として、現代の若者たちが男女の区別もなくなりつつ、すべてではないが、男性の骨の抜けたような育ち方に心強さと考えられるものがなく、楽しんで金銭を得ようとし、遊び事や享楽に夢中になり、悪事をして、一生汚点を背負っていても罪の意識もなく、自分の不始末を反省するでもなく、果ては他人のせいにしたり、全くの自己主義的な民主教育、ぜいたくな暮らしをしていても不満たらたらで、こんな状態ではアメリカのように老大国となり、近々に後進国に抜きさられることであろうと嘆いておられます。

また、氏は七十二歳を過ぎられたが、運動が好きで、テニス、ソフトボール等同好グループで楽しんでおり、血圧が多少高いが週二、三回はジョギングも楽しんでます。また現役で薬局の店番もしておられます。今後も健康で活躍をされんことを期待いたします。

（京都府 西川 貞行）